

京・畿内の戦国時代

目次

{初めに}

1、戦国時代の呼称

2、足利政権の特徴

3、応仁の乱

4、戦乱中の京・畿内の政権の変遷

(1) 義政将軍・^{よしひさ}義尚将軍政権期 (1473～1489年)

(2) ^{かんれい}管領細川政元政権期 (1493～1507年)

(3) 管領細川高国・管領代大内義興連立の政権期 (1508～1518年)

(4) 管領細川高国政権期 (1518～1527年)

(5) 細川晴元政権期 (1527～1549年)

(6) ^{ながよし}三好長慶政権期 (1549～1563年)

(7) 松永久秀と三好三人衆との混乱の政局 (1563～1568年)

(8) 織田信長の入京 (1568年)

5、戦国時代とは何か

(1) 畿内の戦国時代

(2) 武士と足利将軍家

{終わりに}

添付資料

○足利将軍家略系図

○細川京兆家(本家)略系図

○戦国時代畿内の略図

{はじめに}

戦国時代はいつからいつまでなのか学説が分かれるところです。ここでは大雑把に言って室町時代の後期とすることにしましょう。

この戦国時代を二つに分類しますと、一つは京を中心とする畿内^{注1}（大和、山城、河内、和泉、摂津の国）、及びその周辺での武士勢力間の中央政権争奪の戦いと地方での戦国大名間での領地拡大闘争となります。中央の闘争も地方での闘争もいずれも下位者が上位者に立ち向かいます。これを下剋上と言います。

京を制圧し、中央政権を打ち建ててることを目標とする勢力間の争いは京・畿内とその周辺で熾烈さを増します。

結局は京・畿内周辺の武士勢力ではなく地方の戦国大名である織田信長が京を制圧し更には信長が15代将軍足利義昭^{よしあき}を京より追放して京に織田政権を打ち建てます。

ここでは北条氏、今川氏、毛利氏等の地方の戦国武将の闘争ではなく、信長が政権を打ち建てて以前に、京で中央政権をねらった複雑怪奇な武士勢力の闘争についてその筋を追って見たいと思います。

戦国時代を理解するために、応仁の乱あたりから話をはじめ戦国時代への道程を探ってみて見たいと思います。

それから政権という言葉を使いますが、戦国時代（室町時代後半）日本全体を統治できた政権はありません。京都や畿内に樹立した政権である足利将軍家も細川管領家^{注2 かんれいけ}も日本どころか畿内をもすべて統治出来ていません。三好長慶^{ながのり}が数年畿内をほぼ統治しただけで、日本のほとんどの地域を支配した政権は織田信長の登場まで待つこととなります。

畿内の政権は足利家将軍を擁して、畿内とその周辺の基点を確保して他の勢力よりも大きい勢力と言えるだけです。

戦国時代は三好長慶が現れるまで畿内の二大勢力である足利将軍家と管領の細川京兆家（本家）の登場人物によってストーリーがなされます。

世代としては三代ですが、両家とも名前が似ています。足利家は「義」の字が最初に付きます。細川家には勝元を含めて「元」の字の付く人が3人います。

大分ストーリーを簡略化しましたが、それでもなじみのない人物が多いので

で「足利将軍家略系図」、「細川管領家（京兆家、本家）勝元以降の略系図」と「主な登場人物」を添付しました。更に近畿地方の当時の略図を添付しました。参照頂きながらお読みいただければと思います。

注1 大和国：奈良県、 山城国：京都市、 河内国：大阪府の東部
和泉国：大阪府の南部、 摂津国：大阪府の中央部、西部と兵庫県の東部

注2 管領家：足利幕府では将軍に次ぐ職位として管領かんれいがあります。管領に就ける家は斯波家、細川家、畠山の三家です。いずれも足利一族です。

1、戦国時代の呼称

戦国時代の呼称は明治に入ってから、戦国大名は太平洋戦争後に学者によって使われ始めた学術用語です。

その時代の人々は「戦国」であるとか「今の世は戦国の世」とは言いませんでした。

この戦国の世（戦国時代）の名は中国の春秋戦国時代から取ってきたものです。

中国史では春秋時代と、戦国時代は区分します。

周が紀元前1023年殷を滅ぼして政権を樹立します。その後周はお家騒動で分裂し、東周と西周になります（東周が主力）。この分裂して周の勢力が落ちて来た時（紀元前770年）から春秋時代と言っています。

この春秋時代は周の重臣である（諸）侯が周政権の主導権を求めて争いを始めます。これを覇権はけんを求めると言います。周の王のコントロールがきかない時代です。

この覇権は齊、晋、秦、宋、楚の間で争われことから春秋五覇と言われました。

彼らの争いは、周を滅ぼして天下を得ようとはしません。周王を担いで自分が天下に号令をかけることが目的としています。

この時代は紀元前479年（孔子没年）までとしています。

春秋の名前の由来は、孔子が自国である魯国の記録を春秋と名付けたこと

から同時代を春秋と呼ぶことになりました。

この後を戦国時代と呼びます（紀元前479～紀元前211年）。

名前を変える由縁は、戦国時代は覇権を求めるのではなく、諸侯が周王と同等の王の位を自称して、天下を統一して君臨することを目標にした時代だからです。覇権ではなく自分の統一王権を求めての争いです。

結果的には秦の始皇帝が有力王たち、更に周を滅ぼし中国を統一して帝の位につき、戦国時代は終わります。

これが中国の春秋戦国時代で春秋時代が約300年、戦国時代が約250年位でしょうか。

日本においては春秋時代を呼称しません。すべて戦国時代で100年位でしょうか。

しかし日本でも織田信長が15代将軍足利義昭を京より追放するまで京での政権樹立を目指した勢力はみな足利家を滅亡させる意志はありませんでした。

足利将軍家を上に頂いて政権を主導しようとしていたのです。ですから信長の義昭京追放までは、中国で言う周王を頂いての覇権を争った春秋時代と同じ政治形態を目指していました。だから日本も戦国時代ではなく春秋時代と称しても良いのではないかと筆者は思います。

しかしここでも一般になじみが深い戦国時代の呼称を使います。

日本の場合は将軍が王か天皇が王かの問題もありますが、当時の武士勢力、戦国大名にとっては足利将軍は正式な統治権を持った王でしょう。

天皇は政治権力を持っていませんし、戦国大名と天皇との直接の接触は織田信長の登場までほとんどありませんのでここではふれません。

2、室町幕府の足利政権の特徴

それではどうして室町時代の後半に戦国時代となったのでしょうか。これを解きほぐして語るには、足利尊氏が立ち上げた政権（室町幕府）の根本と応仁の乱勃発の由縁についての概略の説明が必要です。

戦国時代に入ったと言われます応仁の乱までの各代将軍の政権模様を試みることにします。

○初代将軍足利尊氏

足利尊氏は後醍醐天皇と協働で鎌倉幕府の北条政権を滅亡させ後醍醐は建武の新政権を打ち建てました。

しかし後醍醐の目的は天皇の親裁（独裁）であったのに対し、尊氏の目的は鎌倉幕府引き継いで足利幕府を開くことでした。後醍醐は認めません。両者は決裂しました。全国の武士勢力は何方につくか決断を迫られます。結局大多数の武士が尊氏につき尊氏が勝利し、室町幕府足利政権が発足するのです。

何故武士の勢力の大多数が尊氏についたかですが、それは足利家が今は無き源頼朝家に次ぐ源氏の筆頭であることと、尊氏自身への魅力からです。彼は後醍醐からもらった関東8か国の領地を味方についた武士に配ります。又その後に勝って得た領地はほとんど味方した武士に配り、自身の直轄地は一国もありません。又戦う時はいつも先陣の直ぐ後ろにあり、戦う武士と共にあります。そして戦いに強いのです。

多くの武士たちは尊氏のカリスマ性と気前の良さ、源氏の嫡流家の名門足利家に自分たちの将来を託したのです。

尊氏の統治体制、室町幕府の体制は将軍と地方は将軍に任命された守護によって統治されます。

京の中央の政治機構は将軍と将軍を補佐する管領かんれいと京に常駐の畿内、近国注1の守護しによってなっています。管領には斯波しば、細川はたけやま、畠山の三家から選ばれます。

関東、東北は鎌倉に本部を置き、鎌倉公方くぼうが関東管領かんれい（上杉家）と管轄地の守護によって統治されます。

鎌倉公方は尊氏の次男基氏もとうじが初代で、以降は基氏の家系が後を継ぎます。

鎌倉公方は関東、奥羽を仕切る権限は有していますが、京都の将軍の支配のもとにあります。関東、奥羽の守護は鎌倉公方に属します。

守護は室町幕府創立、足利政健に寄与した武士たちが任命されました。

守護は一国に原則一人です。一国の政治を統治します。任命権は将軍にあります。時代が進むにつれ既得権化し世襲となります。

有力な守護は一人又一族で複数の国の守護を兼帯する者もあります。

尊氏は守護が将軍を支える政治機構を作りました。

○二代義詮^{よしあきら}

幼い時より父尊氏と共に苦勞して、父の良き理解者であり、尊氏の晩年はなくてはならない相棒でした。

尊氏の亡き後、かつての勢いはなくなった後醍醐天皇系の南朝が存続し、いわゆる南北朝時代でしたが、臣下よりの信望も厚く政権はゆるぎないと見られていましたが38歳で亡くなります。

○三代義満^{よしみつ}

父の義詮が亡くなった時は11歳でした。管領の細川頼之^{よりゆき}が後見人となり支えました。(管領は後世の家老職)

やがて長じて青年期に、管領細川頼之と同じく管領家の斯波義将^{よしまさ}とが対立する中でこれを調整して政治手腕を発揮します。

公家、寺社と武士たちの領地についてのもめごとを収め、守護の反乱を抑え、宮中においても天皇に次ぐ地位を確保し、足利将軍家が武士たちの中で他に追隨を許さないぬきんじた位にあることを示しました。

更に^{注2}南朝と北朝を合体させることに成功させ、足利政権を盤石なんものにしました。

○四代義持^{よしもち}

専制政治を行った父の義満の嫡男として四代目将軍が決まっていたましたが、義満の晩年に嫌われその地位が危なくなっていました。その時義満が突然亡くなりました。

細川、斯波、畠山等の管領^{かんれい}、その外有力守護は義持を将軍に推戴します。

義持は将軍になります。

政体は将軍と有力守護との合議制となります。

義持はこの体制に不満はありましたが、それでも息子の義量^{よしかず}に将軍職を譲ることが出来、まあ満足していました。

ところが五代義量が若死にしてしまいます。外に息子はいません。

そこで臣下が次期将軍を決めて欲しいと言いますと、「自分が言っても結局は後でお前たちが決めてしまうのだから」と言って決めないで死んでしまいます。

義持が亡くなった後で、義満の息子たち（義持の兄弟）3人に籤くじをひいてもらって決めることにしました。

この籤によって決まったのが義教よしのり将軍です。

○六代義教よしのり

就任の初めは兄の義持時代とおなじく有力守護との合議制で運営していましたが、有力守護たちが息子との代替わりで、だんだん義教が専制色を強めていきます。守護家の相続に干渉し一族の中での守護職を義教が決めるようになります。気に入らぬ守護や公家を誅殺します。

その頃関東公方の足利持氏が義教に反抗して立ち上がります。これを討滅し、一層義教の専横が高まります。

播磨の守護の赤松満祐みつすけは予て義教の意にそわず、誅罰されるであろうとのうわさがたっていました。

満祐は殺されるのであればと、逆に義教を自宅に接待した所で、謀殺してしまいました。

悪御所と言われた将軍でしたが、主君を弑逆は他の臣下が認めません。結局満祐は将軍家家臣団（管領、守護たち）に討たれます。

義教の嫡男義勝よしかつが七代将軍に就任しますが、夭折します。

そこでその弟の義政よしまさが八代将軍につきます。義政以降は次節3、応仁の乱でお話します。

足利家政権設立の（室町幕府将軍）の特徴をまとめます。

幕府を創設した偉大なる初代将軍尊氏、そして源氏の筆頭で他の武士の追隨を許さない名門足利家です。

足利将軍家の直轄地（御料所）は畿内を中心に全国にばらつき、一国分の領地に満たない規模。そのため直臣（奉公衆、徳川家での旗本）の人数が他の武家政権（頼朝、北条、織田、豊臣、徳川政権）に比べて極端に少ないことです。奉公衆は千人か2千人規模とされています。

因みに徳川将軍家の直臣（旗本、御家人）は2万2千人ぐらいで、その家来も含めると8万人位とされています。

国ごとに守護を任命して全国統治をしますが、複数の国を兼帯する有力守護が存在します。守護は封建領主で軍事力を有します。

軍事力では、一守護より足利将軍家の方がはるかに小さいのです。

そして尊氏は近畿、近国、東海、中国地方の守護が京に常駐して将軍を補佐するシステムをとります。即ち将軍と管領、有力守護との合議制です。

実際には上述のように、将軍の専制（尊氏、義満、義教）の時あり、逆に管領や有力守護連合が政体をリードすることもあります。両者は常に実権獲得の綱引きをします。（主導権の取り合い）

しかし天下を足利家にとって代わる家がないことを、足利家も守護も真底信じていることです。

ですから将軍と管領・守護とは争うことはあっても足利家（室町幕府）は続いたのです。15代^{よしあき}義昭将軍が織田信長に京を追放されるまで。

注1 守護：源頼朝が取り入れた守護の権限は主にその国の軍事指揮権でした。足利尊氏・室町幕府の守護はそれよりも大きくその国の統治権を与えました。室町幕府の守護を鎌倉時代の守護と区別するため守護大名お言っていますがこれは学術用語です。

注2 南朝と北朝：尊氏は後醍醐天皇と仲たがいしましたが、後醍醐の南朝天皇系を残したままでした。この時期を南北朝時代と言います。（1336～1392年）。室町時代に含めることもあります。

3、応仁の乱

悪御所と言われ、気に入らない公家も守護を平気で誅殺し、最後は守護

赤松^{みつすけ}満祐に謀殺された六代^{よしのり}義教の跡はその子の七代義勝が夭折したため、続いて

弟の^{よしまさ}義政が八代将軍となりました。

義政が成人するまでは管領家の細川家と畠山家とが仕切りますが、両者は主権争いをします。

そこに義政の母親の日野重子や乳母のいままいりのつばね今参局が暗躍し政局は安定しません。

義政は成人すると専制をめざします。これを許さじと管領細川勝元と有力守護山名持豊もちとよ（宗全そうぜん）とが連合して対峙します。

更に管領家の畠山家としば斯波両家で家督をめぐる御家騒動が起こり、この争いに義政將軍、細川勝元、山名持豊が介入し、政局は一層混迷していきます。

義政は男子が出生せず、弟のよしみ義視を自分の後の將軍を託すことにしました。

ところが義視が僧から還俗して次期將軍に決定した後に義政に男子が出生しました。九代將軍よしひさ義尚の誕生です。

義政は我が子を次期將軍にするために將軍を約束した弟の義視を殺そうとしました。義視はそれに感づいて細川勝元のもとに逃げます。勝元と持豊は協同で義視をかばいます。

この事件は大方の守護から義政は非難され、義政は將軍職はそのままですが、政局から一旦失脚です。

畠山、斯波両家のお家騒動の対応も義視謀殺未遂事件も、山名持豊と細川勝元は義政將軍に対し協同で当たって来ました。幕府は今後は細川・山名二人の体制になると思われました。

ところがここで、一転山名持豊は細川勝元を追い落とす戦略にでます。

持豊は、中国・九州地方の有力守護（周防、長門、安芸、備後、豊前、筑前）である大内政弘まさひろと畠山家騒動で追いやられていた畠山義就よしなりと組み、そして義政將軍を擁して一挙に勝元を政局の中心から排除して、実権を握りました。

勝元は巻き返しを図るべく味方の守護たちを京に呼び寄せ、更に義政將軍を持豊より奪還し味方にします。

一方、出遅れた山名方も味方の守護たちを呼びよせ、京及びその周辺で

大戦となります。

これが応仁の乱です。応仁元年（1467）から文明9年（1477）の10年に及ぶ長期戦となりました。

畿内、近国、中国、四国、東海の守護が、細川・義政将軍側（東軍）と山名側（西軍）に分かれて争いました。最初東軍にいた義視（義政将軍の弟）はその後西軍に転じます。

京の洛中はほとんど全焼の被害の中でもなかなか決着がつかず、その内山名宗全も細川勝元も病死してしまいます。（1473年）

守護が京で戦っている間に地元（分国）の守護代や被官（国人、国衆）たちが守護領国を我が物にしようとします。

もう守護たちは地元に戻らねばなりません。義政将軍からも和議の話があり、東軍（義政将軍）が優勢でありましたので東軍勝利の形で終戦となります。

しかし義政将軍の京には細川氏と畠山政長しか残りません。

応仁の乱で足利政権（幕府）の威力が衰退し、守護代、守護の被官、国人たちは守護の支配に従わず、自領の拡大に励みます。守護たちは地元（領国）に戻って将軍権力に頼らず自力で対応せねばなりません。戦国時代はもう始まっていたのです。

4、戦乱の京、畿内の政権

地方での戦国時代は始まりました。これは中央政権である足利政権（室町幕府）の地方統治力が衰退したからです。

足利政権（幕府）は京（中央）で将軍と守護の連合によって成り立っています。時代によってどちらかが強い時がありますが、源氏の棟梁としての将軍家の高い権威と守護の軍事力によって運営されます。

守護も守護領国を統治するには足利将軍家の権威が必要なのです。将軍家の権威が衰退すると^{注1}守護代や^{注2}被官（国人・国衆）たちは守護に逆らって自行動を取ろうとします。そうなれば守護は自力だけで彼らに対応する必要があります。

戦国末期にほとんどの守護は彼等によって滅びます（下剋上）。52の守護家の内で江戸時代まで生き残った守護は島津氏（薩摩）佐竹氏（秋田）の2家だけです。

さてここでは京の中央政権争奪をめぐっての戦国時代を主テーマとします。それは平安時代から江戸時代まで京を制圧する者が日本全国を支配する者

になって行くからです。

鎌倉幕府は鎌倉を、徳川幕府は江戸に幕府を開きますが、京都の制圧が根本です。両幕府とも滅びる時は先に京を争奪されています。

それでは応仁の乱後の京都中央政権がどのようにして戦国時代に突入し、どのような勢力が政権を目指したのかを語り、戦国時代は何だったのか見てみたいと思います。

今日の我々一般が戦国時代によく知る武将としては北条早雲、毛利元就^{もとなり}、武田信玄、上杉謙信、今川義元、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康でしょうか。

この中で信長が初めて京を完全制圧して後に、15代将軍足利義昭^{よしあき}を京から追放して新たな政権を打ち建てたとされ、戦国時代は終わったと見る向きが多いのです。

その後秀吉、家康が継承しましたが、京はしっかり制圧しています。

信長以前より地方の大型の戦国大名であった北条早雲、毛利元就、武田信玄、上杉謙信、今川義元は京に軍を進めたことはありません。

しかし応仁の乱後、信長が政権を打ち建てる天正元年（1573）以前に中央政権を目指した京の周辺勢力が約100年間も京、畿内（大和・山城・河内・和泉・摂津）と京周辺の国（丹波・丹後・近江・播磨等）の地域において激しい戦乱が繰り返されていたのです。

戦国時代における京・畿内政権の事は、通常15代将軍義昭と信長の入京（1568年）から始まります。

しかし信長の京制圧の前の100年間の京、畿内の政権争奪戦を語らずして戦国時代を理解したことになりません。

よく知られる地方の戦国大名間の戦いに比し、主役級の人物も一般によく知られておらず、敵、味方が入れ替わり内容が複雑です。何とか筆者が簡潔にして概略を記してみたいと思います。

ここで政権といいますのは全国政権ではありません。京を直接、間接に制圧した政権を言います。

注1 守護代：有力被官で守護に次ぐ職位で、守護が京滞在が長いので、実質守護領国を運営します。

注2 被官：鎌倉時代よりの在地領主である国人・国衆が室町時代になり

守護の家来になって行きます。当初主従関係は厚くなく外様の家来と言えます。

注3 国人：鎌倉時代の地頭で、有力在地領主

国衆：国人より規模の小さい在地領主

国人・国衆と一括して在地領主をさすことが多い。

(1) 義政^{よしまさ}将軍（1435～1490年）・義尚^{よしひさ}将軍政権期（1473～1489年）

応仁の乱後、ほとんどの守護が地元（領国）に帰ってしまった後、義政将軍と九代義尚将軍を京で支えるのは細川一族と畠山政長だけです。細川氏の当主勝元は未だ幼いので畠山政長が管領です。

義政は文明7年（1473）の応仁の乱中に息子の義尚に将軍職を譲ってしまいます。自分の後の家督を確定させたかったのです。義尚は未だ幼く政務にはつけません。義政が実際の将軍です。

義政の政治は以前からそうですが、ブレーンを使って指図しますから責任を取らなければならない時はブレーン（伊勢貞親や季瓊真薬^{きけいしんずい}）にとらせます。応仁の乱後は妻の日野富子等を使います。富子に悪評がたちます。

しかし義尚が成人になると父親の義政のコントロール嫌い、父親と喧嘩して将軍職を執行するようになりました。父親も母親も一線を退くことになります。

足利将軍家に権威は弱っていきますが、義政は畿内の守護たちに費用を出させ銀閣寺を造ります。

地方の守護は将軍の命令を聞きませんが、畿内や京周辺の守護は形だけは従います。

一方義尚^{よしひさ}は足利将軍家の権力の再興を図るために積極策にでます。直臣である奉公衆（譜代の直臣）は応仁の乱以降、自領が守護に盗られて生活困窮にありました。

義尚は最も目に余る近江の南半国守護六角高頼征伐をするため出陣しました。ところが義尚が出陣中に病死してしまうのです。（延徳元年、1489年 25歳）

義尚についての評価は分かれるところですが、足利将軍家を昔のように隆盛を取り戻し、守護に君臨するため自ら出陣しました。将軍が

自ら出陣したのは尊氏と二代義詮以来です。

息子の死で、父親の義政の失望は大きく茫然自失の日々でもう次期将軍などどうでもよくなっていたのでしょう。妻の富子(義尚の母親)の推戴した弟の義視の子^{よしたね}義植次の将軍に決めました。富子と義植の関係は叔母と甥です。

義視は義政の弟、即ち応仁の乱で山名側の西軍に付いて義政に敵対した人です。

まもなく義政も病没します。(延徳2年 1490)

足利義政は足利家政権を没落の方向にもって行った将軍と言えます。足利幕府、足利政権創設の尊氏、足利将軍家を公家、武士の中で不動の地位を確立させた三代義満、鎌倉公方足利氏を討滅し専制将軍として守護を屈服させた義教。

義教の子の義政も、専制を目指しました、義政、細川勝元、山名宗全との政局の主導権争いから応仁の乱を引き起こし、勝元と宗全死没後、乱の終戦に失敗しました。戦後、守護のほとんどが領国(分国)に帰り、幕府政治は行き詰り、幕府の権威は地方に及ばなくなり、権威は著しく減退してしまいました。

しかし先ず畿内(大和、山城、河内、和泉、摂津)と京周辺国(近江、丹波、丹後、播磨等)の統治力を再興しようとした義政の子の義尚は早世します。

(2) 管領細川政元政権期(1493~1507年)

九代義尚が死没した後は、義政因縁の弟義視の息子^{よしたね}義植(義材)が十代将軍に就任します(義視は応仁の乱中に兄義政に反抗して山名宗全に乗り換える)。

細川政元(勝元の息子)は畠山政長に代わり、管領職に就いていましたが、政局の主導権は十代義植将軍と畠山政長が、握っていました。

義植と管領畠山政長は、政長と敵対関係にある畠山^{もとしいえ}基家(畠山家争乱での敵義就の子)を討つため河内に出陣します。

二人の京不在について政元は、義政のもう一人の弟政和まさともの息子足利義澄よしずみを将軍として担ぎ出します（義植とは従弟）。

政元は畠山基家と手を握り、追手を差し向け政長を自殺に追い込み、義植を捕えて京で幽閉します。（明応2年 1493年）

家臣が君主の将軍を変えてしまったのです。これを明応の政変と言っています。

これが下剋上の始まりとして、これをもって戦国時代の始まりと定義する学者もいます。

義植はその後京を逃げだし、中国筋の雄、大内氏の庇護を受けます。

十一代義澄将軍は管領細川政元の傀儡将軍です。京の政権は実質政元が握りました。

政元は勝元の一人息子で、勝元の死で応仁の乱中7歳で家督を相続し、親類の守護や家臣に支えられ成人して管領に就任し、自分の主導の政局を狙っていたのです。

そしてクーデターをおこして京の政権を掌中にしました。

将軍の権威が落ちる中で、政元も地方の守護を統率する力はありません。

しかも畿内では河内での畠山家の騒動も続き、畿内を全面的に制圧したとは言えませんが幕府の中では一応専制の権力を持ちました。

ここで政元の後継について問題が起こります。政元には子供がいません。彼が修験道に励んだため子をつくらないとか衆道であったとかの噂はありました。

ここで細川家（一族）についてです。

細川家は足利一族です。鎌倉時代は規模が小さく、足利の家臣と言って良いでしょう。尊氏が立ち上がった時からの一族で重臣です。その後斯波、畠山と並んで三管領家の一家になりました。

一族は多岐に別れます。本家は管領家で勝元—政元の家です。上屋形（京兆家）と言われ、摂津、丹波、讃岐、土佐の守護を兼帯します。

下屋形言われる細川は阿波守護です。和泉細川は和泉の守護です。備中細川は備中の守護です。一族で7か国の守護を兼帯します。

この外にもいくつかの庶流があり、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた細川藤孝（幽斎）家も庶流の一つですが守護家ではありません。足利将軍家の奉公人（直臣旗本）の家柄でした。（熊本藩主、細川護熙元総理のお家）

政元は養子をとります。

摂関家の九条政基の子澄之^{すみゆき}を迎えます。これに身内や家臣団の大部分が

反発したので、政元は阿波守護細川家からも養子迎えます。澄元^{すみもと}です。

後継ぎ候補が二人になりました。

普通自分に子が出来なければ血縁関係にある一族から養子を迎えますが、何故血縁関係のない九条家（摂関家）から迎えたのか分かりません。

後世の推測では、摂関家からの養子で、細川家を足利家の上の地位にして、將軍職を乗っ取ろうとの意図があったのではないかとの説もあります。

政元の専制は続きますが一方、京兆家（細川本家）の直臣（内衆）が独自行動を取る勢力となり、政元の専制にも陰りが出てきます。

この養子の二人に直臣が分かれます。

澄元には三好之長^{ゆきなが すみもと}（澄元の出身の阿波守護の被官）がつきます

しかし内衆（細川本家の家来）の薬師寺長忠、香西元長、竹田孫七が養子澄之を擁立して蜂起して、政元と養子澄元を襲い、政元を謀殺してしまいます。澄元は甲賀へ逃げました。（永正4年 1507）

政元政権は終わりました。

ここで野州家の細川家の高国が立ち上がり一カ月後には澄之グループを討ちます。（野州家は代々下野守を名乗ることから野州家と言います。伊予国宅間郡の分郡守護です。）

澄元も京に戻ってきますが、高国は京より澄元を追い出します。

そこに中国の雄大内義興^{よしおき}が庇護していた前將軍義植^{よしたね}を連れて入京します。

現將軍義澄は追われて近江に避難します。義植が將軍に復帰します。

これからは細川高国と大内義興の連合で京の政局を主導します。

（3）管領細川高国・管領代大内義興連立の政権期（1508～1518年）

高国は細川本家（京兆家）の養子となり管領に就任します。高国が政元存命中に養子になっていたのか、死後かはっきりしません。

大内義興は管領代に就任し、細川高国（管領）と大内義興の連立政権です。

前将軍の義植が将軍に復帰し、細川政元に擁立されていた義澄は将軍の座を奪われ、逃れた近江から巻き返しを図ろうとしましたが、京を奪還できず、近江で亡くなります。(永正8年 1511)

又細川澄元、それを支援する三好之長そして前将軍足利義澄の抵抗もありましたが高国と義興の二人は義植(二度目の将軍就任)を頂いてなんとか政権を維持していました。

ところが大内義興が国に帰ってしまいました(永正15年 1518)。

中国筋で^{あまこ}尼子氏の勢力が拡大してきたため、これを抑えるためです。

(4) 管領細川高国政権期(1518~1527年)

大内義興が国に帰って、高国の単独政権となりますが、大内氏がいなくなった畿内は又戦乱の時代に戻ります。

高国は細川澄元・三好之長の巻き返しに一旦負けますが、京を奪還します。この戦いで、之長は自殺、澄元は阿波に戻って死没します(1520)

そしてこの戦いで将軍義植は高国と離れて澄元側に付いたため高国と隙間が出来、堺に出奔します。

将軍を頂く必要がある高国は先に追放した足利義澄(近江で1511年没)の子義晴を十二代 将軍に据えました。(1521年、義晴は播磨の赤松義村が養育していました)

畿内を制圧するに、将軍の御旗が必要なのです。将軍自身には軍力は小さいのです。しかし畿内、京の周辺国を支配する政権を樹立するには将軍を上頂く必要があるとの考えはこの時代の管領、守護や武士たちの共通した考え方です。

管領細川高国は政権確立のため将軍を足利義澄、義植、義晴(義澄の子)とその時の政局で将軍を変えます。

高国体制は摂津の伊丹氏・能勢氏、丹波守護代の内藤氏が内衆(有力家臣)として支えていました。

一方阿波では、細川澄元(1520年没)の子晴元が義澄将軍(1511年没)の子^{よしつな}義維(高国が将軍に擁立した義晴の弟)を打ち立てて、高国

打倒を窺います。

ここで、高国は阿波方への内通したと称して丹波の国人（被官）^{こうさい}香西元盛を謀殺します。怒った兄弟の波多野元清と柳本賢治が高国に反抗します。

そこに阿波の細川晴元、三好元長（阿波細川家の家臣）が足利義維を打ち立て、摂津から上陸して高国と対戦します。

この時香西氏や波多野氏は阿波方に味方します。

細川晴元と高国の対戦は永正17年（1520）より享禄4年（1531年）まで続きます。

足利将軍家は義澄の嫡男系の義晴—^{よしてる}義輝—^{よしあき}義昭そして義澄の次男系の^{よしつな}義維（堺公方）—^{よしひで}義栄と義澄の家系が将軍職に就きます。

義植には子が出来ず、後は将軍の家督争いには参画しません。（義植1523年没）

（5）細川晴元政権期（1527～1549年）

晴元の攻勢で高国は京を逃れ播磨の赤松政村、同守護代浦上村宗の支援を得るため播磨に下ります。義晴将軍は近江に逃れて六角定頼に保護されます。

高国は巻き返しを図ろうとしますが、赤松政村の裏切りで晴元に敗れ自害します。（享禄4年 1531）

晴元と^{よしつな}義維は京に入らず、堺で指揮します。義維は堺公方と呼ばれます。

柳本賢治（丹波の国人 高国に兄を殺さる）が京都で晴元の代官として仕切っていましたが暗殺されます（1530年）。

その後の京都代官は茨木長隆（摂津国人）です。

高国を滅ぼしながら、何故細川晴元と足利義維（堺公方）が京に入って政権確保の宣言が出来なかったと言いますとそれは阿波組の中での不仲が一つです。

細川晴元・茨木長隆（摂津）派と三好元長の争いがあり、元長は敗死します（天文元年 1532）。晴元は更に堺公方足利義維とも仲たがいに、足利義維（堺公方）は阿波に帰ってしまいます。

晴元は堺公方の義維がいなくなったので義晴將軍との間の修復を図り、上に頂きます。

高国もそうでしたが、京での政權樹立のためには足利將軍家を上に頂く必要があるとの認識が晴元にもあります。それが当時まだまだ一般的な思想体系だったのです。細川家が棟梁の形では武士たちへの統率力が足りないとの考え方でしょう。

しかし^{よしたね}義植將軍も、^{よしずみ}義澄將軍も、^{よしつな}義維堺公方も細川高国や晴元の担ぐ御輿に大人しく乗らず自己主張をします。(政權の主導を図る)そこで足利將軍家と細川管領家は政權の主導権をめぐる仲違いをします。そして分かれて又くっつく政局を展開します。

その後細川晴元は細川高国の弟の晴国や一向一揆との戦いを制圧してやっと入洛して、政權樹立を確保しようとします。(天文5年 1536)

京での晴元の政權は、これまでの協力者(下記の国人、国衆たち)が自己主張をはじめ互いに争い、收拾がつかなくなっていくます。

○^{よしながよし}三好長慶(仙熊・範長)

本願寺との和睦で功勞。晴元に自害させられた元長の息子、晴元と和解して被官になる

○木沢長政

摂津の国衆、畠山被官より高国被官、晴国被官と変わる
晴元、三好長慶と対立し、戦死(天文11年 1542)

○茨木長隆

摂津の国衆、晴元の京都代官、晴元の下で最大の実力者

○三好政長

三好一族、長慶とは異なる家系で長慶と対立

細川晴元は義晴將軍と仲たがいし、義晴將軍は高国の跡目と称する高国の養子細川氏綱と結びます。

三好長慶も氏綱と手を結び、晴元・三好政長と対立し、戦闘の結果長慶が勝ちます。

長慶は細川氏綱を擁して上洛します。

長慶は細川家当主を晴元から氏綱に変えました。(天文18年 1549)

晴元政權は崩壊です。

(6) 三好^{ながよし}長慶政権期 (1549～1563)

義晴将軍が病没して子の^{よしてる}義輝 (^{よしふじ}義藤) が跡 (十三代将軍) を継ぎます。

形の上では義輝将軍—細川氏綱 (管領家) —三好長慶のラインとなりますが実権は長慶です。

しかし細川晴元は近江の六角定頼の支援を得て抵抗を続けます。そして長慶と晴元の間で和睦が成立します。(天文21年 1552)

- 晴元 (澄元の子) の嫡男聡明丸を長慶が取り立てる
- 氏綱 (高国の養子) が京兆家 (管領家・本家) を相続する
- 義輝将軍の上洛 (近江から)
- 晴元は出家する。(引退)

要するに細川本家の当主は澄元系の晴元と高国系の氏綱 (長慶の傀儡) が並立することになります。

ここで長慶と義輝将軍が不和となり、義輝は細川晴元のいる近江国へ出奔します。(1553年)

それ以降義輝将軍・晴元と三好長慶との対立、対戦となりますが、和睦が成立し (永禄元年 1558)、長慶は義輝を将軍と仰ぎます。

長慶は晴元の子の聡明丸を細川本家 (京兆家) の当主としますが、もう長慶にとっては細川家は必要がない存在で、義輝将軍の家臣としてふるまいます。

長慶は主君である晴元とも和議が成立し (永禄4年 1561)、晴元は完全に引退し、その後摂津富田荘の善門寺で病没します (永禄6年 1563)。

^{ながよし}長慶は芥川城 (摂津)、飯盛城 (河内) に拠点を置いて活動します。

ここで畿内。京周辺国は三好長慶によって制圧され、義輝将軍を頂く三好政権がなつたと言えます。支配体制は次の通りです。(1559～1563年)

- 山城— 細川氏綱 (高国養子、細川家当主)
- 摂津— 三好義興 (長慶の嫡男)

大和一 松永久秀（長慶の重臣）
和泉一 十河一存（長慶の弟）
丹波一 松永宗勝・松永遜六（松永久秀の甥）
淡路一 安宅冬康（長慶の弟）
河内北部一三好長慶（本人）
河内南部一三好実休（長慶の弟）

ほとんど三好一族で占めます。

永禄4年（1561）から永禄5年（1562）に近江の六角氏が細川晴元の次男晴之を擁立して更に畠山氏と連携して長慶に対抗します。畠山氏と和泉での戦いでは長慶の弟の実休が戦死しますが戦勝します。これにより六角氏とは和議が整います。

長慶も京・畿内で絶対的に制圧していたとは言えないのですが、これまで細川氏（高国、澄元、晴元）の政権よりは京・畿内の制圧の面積は大きいと言えます。

細川政権は実際はどここの国も面で制圧したとは言えないのです。それぞれの国の主要地点のいくつかを郡単位で制圧しただけです。

三好長慶は畿内、近国をほぼ面で制圧しました。

近畿、近国以外の地方勢力は既に一国単位を支配する戦国大名が主体の時代に入っていました。近畿の勢力で戦国大名言われたのは三好長慶が最初と言って良いでしょう。

これまでは畿内の中央政権を目指す勢力とはいえ、一国さえも完全に支配できる戦国大名が三好政権までなかったと言えます。

15世紀末には地方では戦国大名が形成されていましたが、畿内では三好長慶が初めての戦国大名と言えます。

三好政権が続けば義輝将軍—長慶で地方の戦国大名をまとめて全国政権の道もあったかもしれません。

しかしご存知のようにそうはなりません。

長慶の一人息子の嫡男^{よしおき}義興が急逝します。（永禄6年8月 1563）

尚、これに先立ち細川晴元が同年3月に、高国養子の氏綱が同年12月に病没します。

外に実子をなく、長慶は養子に弟^{そごうかずまさ}十河一存の子の^{よしつぐ}義継を迎えますが、長慶は実子を亡くして気落ちしてか翌年7月に病没します（永禄7年 1564）。

(7) 松永久秀と三好三人衆との混乱の政局（1563～1568）

長慶が没して^{よして}義輝將軍は上杉謙信等地方の戦国大名に互いの不戦を呼びかけ京の自分の下に参じるように求めます。

義輝は足利將軍家の政権の復権を働きかけます。

これを三好政権への反乱と見て松永久秀と三好三人衆は義輝のこの動きに恐れを感じます。

三好義継（長慶の養子）と松永久通（松永久秀の子）が京の義輝將軍を襲い謀殺します。（永禄8年 1565）

義輝將軍も怪しげな状況から攻められた時には京からの脱出を考えていました。三好、松永の軍団が京の近郊に集結したところで和議の話が持ち上がったので義輝將軍は京を逃げずに御所にいました。そこに三好と松永の軍団が急襲して義輝將軍を殺してしまったのです。松永久秀と三好三人衆は主君である將軍を和議休戦中に殺してしまいました。

足利家では將軍が家臣に謀殺されたのは六代將軍義教以来二人目です。

しかし彼らの政権維持には足利將軍は必要なのです。傀儡將軍として阿波にいた^{よしひで}足利義栄を推戴し、十四代將軍としました。義栄は義維（堺公方）の子です。

戦国時代でも主君と戦ったり主君の追放はあっても主君を殺すことはめったにありません。

戦国時代が下剋上と言われてもこのモラルはありました。

これまでの足利—細川—三好長慶時代までは家臣が主君を殺していません。

織田信長も主君の土岐氏、15代將軍の義昭も追放です。秀吉も信長の遺子を直接手にかけていません。

主君を謀殺したのは戦国時代では例が少なく、この事件と明智光秀の信長謀殺の二件が有名です。

さてこの義輝謀殺した松永久秀（長慶の重臣）と三好三衆（三好一族）との間で直ぐに政権をめぐって争いが起きます。

三好三人衆とは、三好長逸、三好宗渭（政康）、岩成友通で三好一族の実力者たちです。

一方、謀殺された義輝將軍の弟で興福寺一条院に出家していた覚慶^{かくけい}が兄の跡を継ぐべく奈良から出奔します。

還俗して名を義昭（善秋）と改めます。

伊賀から近江そして越前の朝倉氏を頼ります。

松永久秀と三好三人衆は奈良で激突し、久秀は東大寺に火をつけ大仏を炎上させます。勝敗の決着はつきません。（永禄10年 1567）

畿内は又収拾のつかない戦乱の事態にまたまた戻りました。

（8）織田信長政権（1568～1582年）

ここで織田信長の登場です。

義昭は朝倉氏から信長を頼り、信長は義昭を担いで京、畿内を一挙に制圧します。（永禄11年 1568）

義昭は15代將軍に就任します。

この時に信長に味方したのは松永久秀で敵対したのは三好三人衆です。

三好三人衆は一旦退いた後、再び京の義昭を、襲いますが、信長が撃退します。（永禄12年 1569）

三人衆は滅亡に向かいます。

十四代將軍義栄は入京を果たせないまま摂津富田^{とんだ}で病死します。（永禄11年 1568）

松永久秀も三好義継（長慶の養子）も一旦は信長に味方しましたがその後 反抗して滅亡します。

松永久秀は出生が分かりません、三好長慶に見いだされ頭角を現し長慶の重臣になりました。

長慶の後の政権を狙ったのですが、三好三人衆と混戦となり、信長に従い、後に裏切り滅亡します。

京を制してこれからと言う時に三好長慶は没し、次期政権かと思われ

た松永久秀も三好三人衆（三好一族）と仲たがいで、結局天下は信長の主導となります。

その後信長と義昭将軍は政権の主導問題で仲たがいで、信長は義昭を京より追放します（元龜4年 1573）。義昭は毛利氏を頼って備後の鞆（広島県福山市）に滞在し、その後活躍なく、豊臣秀吉時代に京に戻り死没します。（慶長2年 1597）

細川管領家（京兆家、本家）は澄元系の晴元も高国系の氏綱も長慶が没する1年前（永祿6年 1563年）に没して滅亡と言うこととなります。晴元の子の信良も豊臣秀吉によって家系は断絶しました。

細川氏で江戸時代まで続いた大名は細川藤孝（幽歳）の家だけです。守護家の家ではなく将軍の奉公衆（側近の臣）の家です。義昭の奉公衆から、信長、秀吉、家康と主君を乗り換えて肥後熊本の藩主になり、明治時代から今日にいたります。

細川護熙元総理大臣のお家です。

両畠山氏の河内でのその後の活動や一揆勢力（一向一揆、山城国一揆）については話を簡潔化するためにほとんどふれていません。

地方の戦国大名や信長以降以降についてはふれていません。信長の京、畿内制圧までの戦国時代としましたので。

5、戦国時代とは何か

（1）畿内の戦国時代

足利将軍家（室町幕府）は応仁の乱後崩壊しそうでしません。

地方は守護に代わり戦国大名が支配します。戦国大名には守護からもありますが、多くは守護代から、守護被官から下剋上で主君の守護を追放してなります。

守護からは武田氏、守護代からは織田氏、被官からは毛利氏、北条氏が戦国大名として有名です。

一方畿内や京周辺からは戦国大名はなかなか出ません。

畿内に細川家（管領・守護）や多くの武士勢力がありましたが、一勢力が一つ又は数カ所の拠点で制圧しても一国を面で制圧出来ない戦乱期が続くのです。

戦国時代末期に三好長慶が最初の戦国大名になりました。(1560年あるいは少し前あたり)

長慶は畿内の数か国を制圧しました。畿内政権と言って良いでしょう。

長慶の制圧以前の畿内は大雑把に言って細川氏の政権と言ってよいのですが、この政権が脆弱な政権なのです。

細川氏の中でのお家騒動で、一つにまとまりません。野州家と言われる伊予宅間郡守護出身の高国系と阿波守護出身の澄元系が争います。そこに加えて細川氏被官が自立し、主君の細川氏に全面的には従がいません(安富、上原、波多野、薬師寺、香西、三好等)。更に中国の大内氏、近江の佐々木氏、播磨の赤松氏、河内の畠山氏、大坂の本願寺が敵味方となって争乱に参画し、争乱は収まりません。

細川氏は足利将軍家が存在しないと自分の政権はなりたないとの考えです。政権の実権は管領家の細川氏が持ち、将軍は傀儡にしようとしませんが、将軍は反発します。

これらが絡み合い互いに敵になったり味方になったりで毎年紛争が絶えまなく起こります。

だれも畿内を一国も制圧できない不安定な細川政権が続きます(政元、高国、澄元、晴元と代わります)。

そしてついに三好長慶が主君の細川晴元を追放(隠居)し、足利義輝将軍と直接結びつき、臣下の形をもって畿内を制圧します。

長慶死後は、長慶の家臣の松永久秀と三好三人衆(一族)が将軍義輝を殺害します。義輝が地方の大名を自分の下に呼び寄せようとしたからです。

しかし義輝将軍殺害後、彼等は義維よしつなの子の義栄よしひで(義輝の従弟)を将軍に擁立します。(義輝も義栄も義澄将軍の孫です)

管領としての又守護としての細川家の人々も、細川家の被官である三好氏も、将軍を殺した三好一族と三好被官の松永久秀も政権を確保するために足利将軍家の存在の必要性を認めています。

(2) 武士と足利将軍家

地方の戦国大名も足利将軍家の存在を必要としています。

将軍一管領一守護体制が整っていた応仁の乱以前はともかく自立して領地を確保しなければならない戦国大名や一般領主(国人、国衆)は将軍家をどのように考えていたのでしょうか。

そもそも足利将軍家が武士の支配の日本で絶対必要であることは南北朝の騒乱の時に決定しました。全国の武士たちのほとんどは後醍醐天皇ではなく足利尊氏につき、尊氏の武士の政権（室町幕府）を樹立させました。足利将軍家の創立です。

足利将軍が任命した守護が地方を治めました。地方の武士は守護の被官となり安定した小領主におさまることが出来ました。

守護は京で将軍を補佐して足利政権（幕府）を支えました。将軍家は一国の直轄地も持たず、直轄地は分散し合計でも一国にも満たない規模です。軍事力も直臣（奉公衆）は千から2千人ほどです。

源頼朝は関東の半分を、鎌倉北条氏は全国の半分を北条一族で、豊臣秀吉は全国1800万石の内240万石を、徳川将軍家は全国3000万石の内750万石を直轄地として支配していました。

足利将軍家は軍事力で武士たちを統制してきたのではないのです。

守護（管領）や一般武士に推されて将軍の座にあるのです。武士たちにとって足利家は他に代われない武士の棟梁の家なのです。

武士たちにとって自分の領地を公領地としてオーソライズしてくれる上部機関が必要なのです。それは天皇・朝廷でなく足利将軍家（幕府）を選びました。

応仁の乱は東軍、西軍の勝ち負けより重大事は、将軍の権威を落としたことです。守護の権威も落としました。地方の武士は守護からの自立が始まり、守護家の中で大きな勢力を持つようになりました。

そしてついには守護を追放して将軍の任命ではなく自力で戦国大名になって行きました。

守護制が機能しなくなった戦国時代でも戦国大名や有力な武士団は、足利将軍の存在は必要と感じていました。特に近畿の勢力は政権の獲得ためには絶対必要と思っていました。

将軍と戦ったり、ついには謀殺しても足利将軍家の退場はありません。上に足利将軍を頂いての政権を目論みます。

将軍の権力はほとんどありません。朝廷の官職を与えるぐらいです。領地紛争の仲裁もほとんど力はありません。

しかし幕府の中で将軍と管領・守護との間で政権の主導権争いが起きようと、応仁の乱が起きようと更に戦国時代に突入しようと武士たちは一つの信仰のように「武士の統治、支配の根本は足利将軍家である」との考えを持ち続けます。

武士が日本を統治した棟梁は平氏の清盛、源氏の頼朝、次に北条氏、室町時代は足利氏です。これは武士たちが選んだのです（合戦で味方につく）

棟梁と武士のとの間は、最初は協力者、同盟者から君主と家来の関係になります。

室町時代も進むにつれて武士の棟梁は足利氏が絶対との観念が固定してしまいます。

これは鎌倉の北条政権もそうですし、江戸幕府の徳川政権もそうです。時代が下るにつれ政権の固定化の観念（どんなに揉めても政権のお家は代えない）が出てきます。たいして権限を持っていないのに足利家を外す、なくす政治体制など考えられなくなります。

別に不思議ではありません。

現在の我々も、長い歴史を背景に政治的に何も権限を持たない天皇を頂点に頂いており、ほとんどの日本人が普通のことと思っています。

天皇ほど歴史はありませんが、この足利家を追放して自ら政権を取るとの考えは当時普通ではありません。

これを実行したのが織田信長なのです。これはもう当時革命的な行動です。

足利政権（室町幕府）においては武士と天皇との関りは足利将軍家を通してです。

武士は南朝の後醍醐天皇ではなく、北朝でもなく尊氏を選んだのです。北朝を立てたのは足利尊氏です。

足利将軍は武士政権（幕府）のオーソライズを天皇に求めました。武士たちは自分の領地のオーソライズを将軍家に求めたのです。

尊氏が必要なのは北朝天皇です。一般武士にとって必要なのは尊氏、即ち足利将軍家なのです。

武士の朝廷での官職は将軍が決めます。天皇・朝廷への接触は足利将軍家だけです。武士と公家との文化面での交流はありますが、政治面ではありません。

天皇家の保護は足利将軍家が一手に行います。従いまして戦国時代に入り、将軍家が安定せず、その財政状態が悪くなりますと、将軍は天皇家の賄いを怠ります。天皇は生活に困窮します。

戦国時代、天皇御所の築地が壊れても修理できず破れた所から御所の建物の中が見えたと言われているほど天皇家は困窮しました。

織田信長は足利義昭将軍を追放した後、将軍家に代わって天皇の保護を行います。足利将軍家の時代が終わったのです。室町幕府の崩壊です。足利家が武士の棟梁の地位を下ろされたのです。

信長が足利家に代わったのです。

足利将軍がいなくとも武士の支配は変わりません。

武士の支配は形だけでも足利将軍家が必要との思いは信長の登場でいっぺんに消えました。

信長の後は豊臣秀吉、徳川家康と続きます。足利家の出番は全く考えられません。

武士の支配は足利家を頂く必要があるとの信仰は消えました。

そして室町時代と戦国の世は終わったのです。

{終わりに}

鎌倉北条氏を滅亡させた後醍醐天皇と足利尊氏、足利政権を終わらせた織田信長、徳川政権を滅亡させた西郷隆盛や桂小五郎。

いずれも前政権は権力とあるいは伝統ある権威を未だ持っていた体制でした。当時の人たちにとってはまさかの政権交代でした。

倒れる時はあつと言うまででした。武士の政権交代は武力革命です。

戦国時代足利将軍の権力は衰えていましたが、それでも大名たちは形の上で将軍家を上に頂くことが必要と思っていました。それがその当時常識だったのです。

織田信長はそれまでの常識を打ち破った革命家と言えます。

室町時代は終わりました（1573年）。一般的にはここで戦国時代は終わったと言います（豊臣政権の樹立時更に徳川幕府の成立まで戦国時代と言う人もいます）。

細川本家、三好氏、松永氏は滅亡しました。

戦国時代の顛末です。

以上

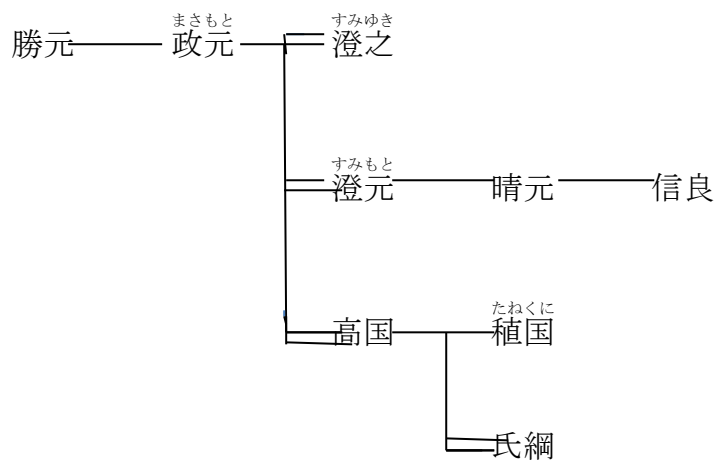
2018年11月15日

梅 一声

参考文献

- 三好長慶 天野忠幸 ミネルヴァ書房 2014年
真実の戦国史 渡邊大門 柏書房 2015年
畿内・近国の戦国合戦（戦争の日本史11）福島克彦 2009 吉川弘文館
戦国の地域国家（日本の時代史12）有光友學 2003年 吉川弘文館
中華文明の誕生（世界の歴史2）尾形勇・平勢隆郎 1998年 中央公論社
中国五千年（陳舜臣中国ライブラリー22）陳舜臣 1999年 集英社
戦国時代の足利将軍 山田康弘（歴史文化ライブラリー）2011年
吉川弘文館
- 松永久秀 天野忠幸 2017年 宮帯出版社
戦国期の室町幕府 今谷明 講談社 2006年
室町幕府と守護権力 川岡 勉 吉川弘文館 2002年
中世後期細川氏の権力構造 古野 貢 吉川弘文館 2008年
室町幕府解体過程の研究 今谷 明 岩波書店 1985年
戦国時代 上・下 永原慶二 2000年 小学館
細川氏の同族連合体制の解体と畿内領国化 末柄 豊（中世の法と政治 2013年 吉川弘文館
室町戦国期の社会構造 池 享 2010年 吉川弘文館 すみや書房
細川両家記 群書類従・第20輯
室町時代 豊田武 ジョン・ホール編 1976年 吉川弘文館
一揆の時代（日本の時代史11） 榎原雅治編 2003年 吉川弘文館
戦国武将合戦事典 峰岸純夫・片岡昭彦編 2005年 吉川弘文館
国史大辞典 吉川弘文館
室町幕府論（日本歴史7 中世） 佐藤進一 1971年 岩波書店
応仁後記 改訂主席集覧
続応仁後記 改訂史籍集覧
足利季世紀 改訂史籍集覧

○細川管領家（京兆家、本家）勝元以降の略系図



(二重線は養子)

{おもな登場人物}

ここでこの100年間に登場する主要人物の概説を掲げます。多くの方になじみがない人物が多いので本文をお読みになる時に参考にしてください。

○足利^{よしまさ}義政（1435～1490）

八代将軍（1443年家督）、父は^{よしのり}義教、兄義勝夭折により家督

応仁の乱を起こした責任者の一人、10年後に乱を終結させたが、幕府は弱体し崩壊に向かう。

息子の^{よしひさ}義尚を将軍にするが、一人息子の義尚が若くして病死して、がっかりして翌年に病死

○細川^{かつもと}勝元（1430～1473）

室町幕府の^{かんれい}管領

応仁の乱を起こし東軍の実質大将として、山名宗全と対戦するが、乱中に西軍の大將山名宗全の病死に引き続き病死

○山名^{そうぜん}宗全（^{もちとよ}持豊）（1404～1473）

応仁の乱を起こし西軍の大將として細川勝元と対戦するが乱中に病死

○足利^{よしひさ}義尚（1465～1489）

九代将軍、父は義政、1473年父在世中に将軍に就任。

成人になって父より実権を取り、近江の六角氏を討つべく出陣したが、陣中で病死、25歳。

○細川^{まさもと}政元（1466～1507）

父は応仁の乱の東の大將勝元、父が乱中に病死し、家督

將軍を^{よしたね}義植から^{よしずみ}義澄に代える。(明応の政変)

管領として幕府の実権を握る。

養子の澄之を擁立する家臣に謀殺される。

○足利^{よしたね}義植(1466～1523)

十代將軍、父は足利^{よしみ}義視(義政將軍の弟)、將軍在職は二度(1490～93と1508～21)

義尚將軍の急な病死で起用が決まる。義政の室日野富子の推薦と言われる。

父^{よしみ}義視は応仁の乱では兄義政に敵対した人。

細川政元のクーデターで將軍を下ろされるが、中国の太守大内義興に保護され、政元亡き後に將軍に復歸したが、その後管領細川高国に將軍を廃され阿波で病没。男の子なし。

○細川^{すみゆき}澄之(1489～1507)

管領政元の養子、実父は関白九条間政基。

香西元長等と養父政元を謀殺、その後細川高国(後の管領)に攻められ自殺。

○細川^{すみもと}澄元(1489～1520)

管領政元の養子、実父は阿波守護細川義春。

政元が養子澄之等に謀殺され、澄之自殺の後、後の管領細川高国との連携に敗れ、阿波に帰り、病没。

○細川高国(1484～1531)

細川政元の後管領。京兆家(細川本家)に養子、実父は細川一族野州家の政春。

澄之等が養父政元を謀殺した後、大内義興と共に澄之を自殺に追い込み。足利義植を將軍に復歸させて、義興と共に連立政権を樹立。

その後義興は周防に帰り、高国の単独政権となる。

將軍義植が高国政権から離脱し、京より出奔。高国は新たに義澄の子義晴を將軍に推戴する(1521)。

阿波から細川澄元の子義晴が元将軍足利義澄の子義維を頂いて、高国と対抗、高国は敗れて自刃。

○大内^{よしおき}義興（1477～1528）

周防、長門、豊前、筑前、石見、安芸の守護、管領代。父は応仁の乱で山名宗全に味方した政弘。
義植将軍を頂いて上京し、細川高国と連立政権を組むが、尼子氏の勃興で周防に帰る

○足利^{よしずみ}義澄（1480～1511）

十一代将軍、将軍家に養子。父は堀越公方足利^{まさとも}政和。（政和は八代義政将の弟）

管領足利政元が十代将軍義植を廃して、義澄を将軍に擁立。
政元が謀殺され、その後すぐに、管領細川高国、大内義興に将軍を下ろされる。義植の将軍復帰。義澄は阿波で病没。
十代将軍義植に男子なく義澄の子（義晴）が将軍家を継ぐことになる。

○細川^{はるもと}晴元（1514～1563）

管領政元の養子で、京を追われ、阿波に戻って病没した澄元の嫡子。
義澄将軍の子^{よしつな}義維を掲げて、三好元長と共に堺に拠点を置き管領細川高国に対抗。
高国には勝ちますが、内紛が起こり、義維（堺公方）は阿波に帰り、元長を自殺に追い込みます。

晴元は義晴将軍・義輝将軍（義晴の子）を立てますが、三好^{ながよし}長慶に背かれて隠棲し病没。

○足利^{よしはる}義晴（1511～1550）

十二代将軍、父は義澄将軍、
足利^{よしたね}義植将軍に子なく、管領細川高国は義澄将軍の子義晴を将軍に擁立。

その後義晴は細川晴元に担がれが、晴元と三好長慶の対立で京に戻れずに近江で病没。

○足利^{よしつな}義維（1509～1573）

堺公方、父は義澄将軍の子、義晴将軍と兄弟
細川晴元や三好元長に担がれて堺で堺公方と称せられたが、その後晴元と仲たがいし、阿波に戻り病死

○足利^{よしてる}義輝（1536～1565）

十三代将軍、父は義晴将軍。
足利氏綱（高国の養子）、足利晴元から三好長慶に乗り換え将軍の座についていたが、長慶が病没の後、松永久秀と三好三人衆に謀殺される。

○足利^{よしひで}義栄（？～1568）

十四代将軍、父は^{よしつな}義維（堺公方）。
義輝将軍が謀殺された後に、三好三人衆によって擁立された将軍。織田信長が義昭（十五代将軍）を伴って入京の頃摂津富田で病没

○足利^{よしあき}義昭（1537～1597）

十五代最後の将軍、父は義晴将軍、義輝将軍の弟。
興福寺一条院に出家（名を覺慶）していたが、兄義輝が謀殺され、還俗して後継として越前の朝倉を頼り、更に織田信長に後援者を代えて、入京して将軍になる。
その後信長と仲たがいして、追放され、毛利氏を頼って備後鞆に転じた。大坂で病死。

○三好^{ながよし}長慶（1522～1564）

父は元長。元長は細川晴元の策略で敗死。
晴元と和して被官となるが、その後晴元に対抗し、晴元を隠居させて実権を奪う。

将軍に義輝を頂くが実権を掌握。畿内の制圧に成功する。畿内で初めての戦国大名と言われる。

しかし一人息子の義興が病死してすぐに氣力を失い病死。

○松永^{ひさひで}久秀（1510～1577）

出身は不明。

三好長慶に随従し頭角を現す。家臣筆頭の重臣となり大和一国を長慶よりもらう。

義輝将軍を謀殺後、三好三人衆と仲たがいし、織田信長が足利義昭と入洛する時は信長に味方。

しかしその後信長に反逆して滅亡。

○織田信長（1534～1582）

戦国時代、室町幕府を終わらした人。

父信秀より尾張半国を引き継ぎ、それから尾張一国、美濃一国を支配の後、足利義昭（十五代将軍）と共に京入洛。その後義昭将軍を追放。

全国をほぼ手中に収めたところで、明智光秀に謀殺さる。

以上

国時代畿内の略図

